

雜
詠

敏鎌もて君が拂ひし皇神の道は埋れじ萬代までも

春到管絃中

岩屋戸の昔おぼゆる物の音に神代のままの春は來にけり

社頭祝君

神垣に君を祈れば萬代と松ふく風も聲そへにけり

寄神祝

天地の神し守ればあめつちとともに榮えん國ぞこのくに

明倫堂講師に召されて

今日のみは親ありし世にかへらなと嬉しきあまり思ひけるかな

躬之はその一生を終るまで、一貫して常に尊皇愛國を諄々と説いて倦むところがなくつた。惜しい哉維新の大業を見ずして逝いたが、天若し借すに十年の齡を許したならば、明治維新の加賀藩の活動に大きな変化があつたらうと信じられるのである。



上田作之丞

清 貧

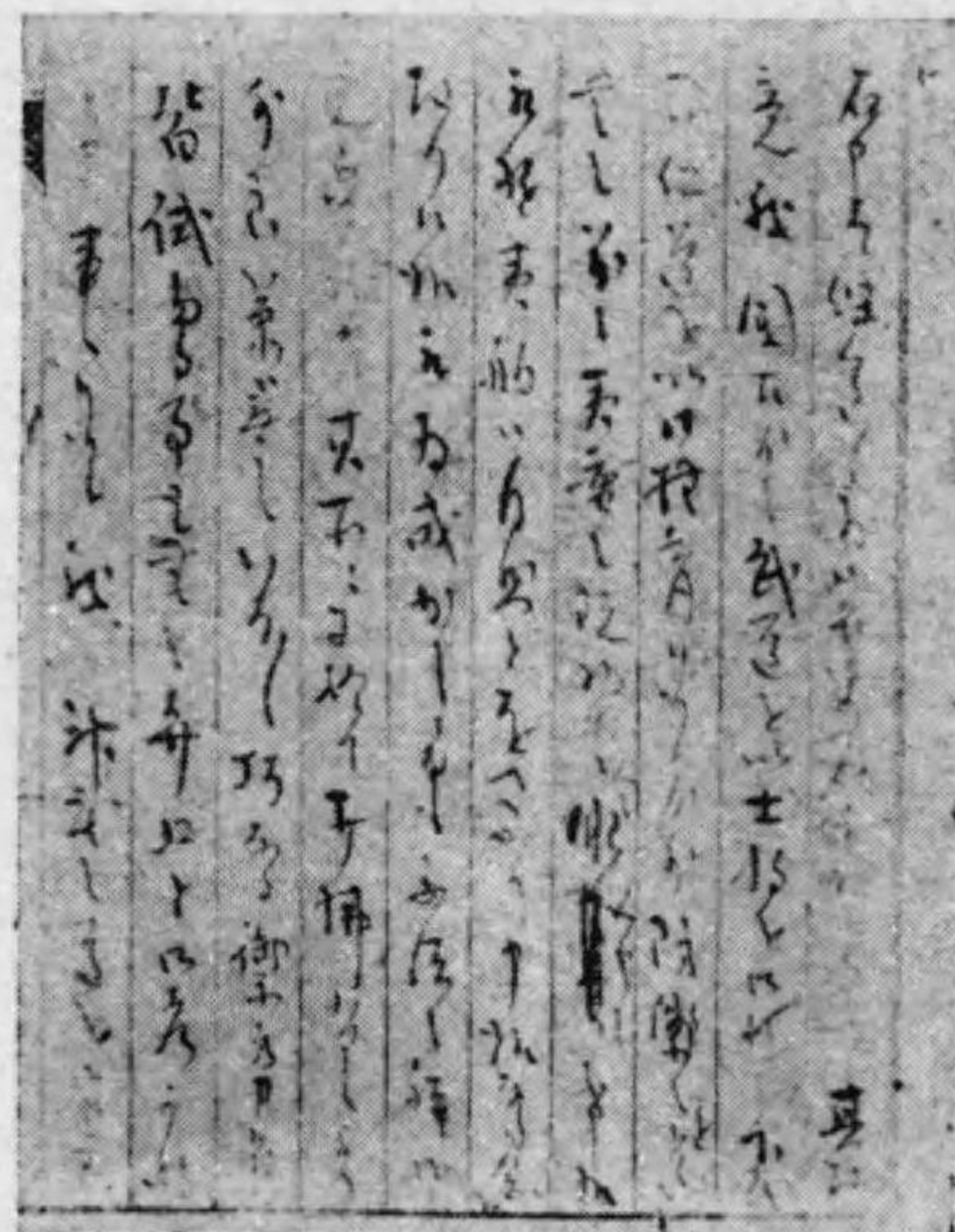
上田作之丞は、天明八年、清右衛門の三男として生まれた。今から百五十年餘り前である。幻齋或は晩年小立野出羽四番丁にゐたので龍郊又は龍野子とも號し、幼名を虎之助といつた。

長兄新太郎は三歳で亡くなり、父は作之丞の十一歳の時病歿した。時に次兄八百記は十二歳、末弟は八歳であつた。母は三兒の養育のため、機織に従事はしたもの、作之丞等は早くも生計の苦痛を味ははねばならなかつた。

其の後八百記が二十歳の時、同僚と論争したことが原因して食祿及び邸宅は沒收せられて浪人となつてしまつた。兄は作之丞に、

「事ここに至つては、わしは、一日も郷土に留まることが出来ない。これから京都に行きたいと思ふ。唯残念なのは母上に孝養を盡くすことの出来ぬことだ。どうかお前は、わしに代つて宜しく頼む。」

と、後事を托して立ち去つた。悲歎の中にも、作之丞は獨力を以て老母を養はうと思ひ、以前にも増して苦しい生活が始められたのである。先づ新坂の上に、素讀及び算數の教授所を



上田作之丞筆蹟

開いた。然しこれだけの収入では一家は到底生計を立てられなかつた。それでも作之丞は少しも苦にせず、赤貧に安んじてゐた。こゝ五六年の間に居を移すこと十一回、その窮狀を察するに十分である。

二十二歳の時、明倫堂の生徒となり、又本多利明が金澤に来るや師と仰ぎ、かたはら著述の手傳などをし、僅かの報酬を得て、生活の資にあてゝゐたこともあつた。三十歳の時、明倫堂の生徒を辭して、本多家へ儒學の師として召抱へられ、又小松の郷學

から招きを受け出張教授にあつたので、家計は更に助けられた。

據遊館

據遊館とは、彼の家塾の名である。彼の生涯の大事業として、この塾教育に心血を注いだ。したがつて子弟の数は藩學明倫堂よりも遙かに多く、その教へるところが如何に優れてゐたかを知ることが出来る。彼は、學則に、

「書籍は多く讀むに及ばざるものに候。只一個の道理を辨へ候後は、數萬卷之書皆古代の糟粕に候。その糟粕を貴び日夜精神を用ひ誦讀致し候時は何等の爲といふ事會得致す可き事肝要に候。」

と述べ、聖賢の學は貴重なものに相違はないが、それは國の内外を異にし、時の古今を隔てた教であるから、徒らに訓誥に没頭しても何等益するところはない。我らが書籍を讀むのは、その義理を理解し、聖賢の精神のあるところを把握するためであつて、それによつて、今日の時務を正解し、社會状態の改善を促し、藩政を昂揚し、國家の興隆を圖らねばならぬ。

更に

「學業進み候淺深は、書籍義理の論上にては見分け難き様に覺え候。日々書見致候人は次第に文字も讀め、義理も分り候故、必ず心術も上達致し、事に臨んで裁判道理に稱ふ筈に候へども、心の置き處、眼の付け處相違の人々は外見と異なる事も多く有之ものに候。依而其業の上達を察し候は日用事實の上にて見候より近き事はこれ無き様に存候。」

と記して、學問の仕方については全く透徹した考へを持つてゐた。すなはち作之丞の學問は、文字を讀み、文章を記すことを強く排撃し、現實の問題を處理し得られる活眼を養ふことを、その目的としてゐた。そして彼は教授の餘暇を見つけては、しばしば當局に上書し、或は知人に其の意見書を配布して批評を求めたこともあつた。したがつて彼の意見に耳を傾ける者が漸く多くなり、彼の名聲は次第に市井の間に高まつて行つた。

黒羽織黨

作之丞の門弟達は、公務のかたはら常に相集つて、政治上の意見を交はしてゐた。其の際

は必ず黒羽織を着てゐたので、時人は何時とはなしに、彼等一味を黒羽織黨と呼んでゐた。彼等の中でも 長連弘・關澤房清・水原保延・近藤信行等は、その主な人物であつた。彼等は作之丞の著はした楠柯談の政治上の改革意見を實現せんとした。楠柯談といふのは作之丞の夢物語であつて、夢に託して藩政の改革を指摘したものである。

夢に烏孫國といふ國があつた。田野よく開け、民俗また善良で、堯舜の時代ではなからうかと疑はれる程であつた。そこで一村落の古老に色々尋ねたところ、

「この國は先頃非常に疲弊し、政治も亂れてゐたが、今の國王が位に即かれてからは、賢臣の意見を用ひられて政治の改革をなされたので、かやうに再び繁榮するやうになつた。」と語つた。

作之丞は、この楠柯談で、暗に人材の拔擢採用と藩政の改革を説いてゐるのである。更に、如何なる方策によつて改革をしたかにまで、物語は續いてゐる。

黒羽織黨一味は、着々その意見を政治の上に反映させ、財政を整理し、諸局の宿弊を除き、

奢侈を禁ずるなど、其の功見るべきものがあつた。然し彼等の行動が新奇をてらひ、或は常軌を逸して漸く世人から排斥されるやうになつた。

「人事の任免に情實關係が動いてゐる。」

「實に排他主義だ。」

「黒羽織黨とは河豚だ。他人を毒さねば止まぬ徒輩だ。」

と、がうがうたる非難を浴びねばならなかつた。ために、安政元年彼等一味は相次いで其の職を去らねばならぬ破境に立つた。作之丞もまたその家塾の閉鎖を命ぜられ、他郷に出るのも禁じられた。時に彼は六十七歳であつた。

其の後八年を経て文久二年國事多端となるに及んで、再び復活し、政治に參與することとなつた。黨員は一致協力して藩治の改革を計つた。なかでも産物方の經營について、最も其の功績を示した。

産物方の目的は、藩内の産業を奨励して藩を富まし、民の福利をはかることであつた。即

ち藩内の主要地に産物集合所を設けて、資金を貸與して産業を奨め、其の製品を買い上げ、或は其の販路を開き、又品質検査をして其の製作品の改良をはかるなど、百方殖産の道を講じた。

黒羽織黨がかやうに藩政に力を用ひ、一藩の富國強兵を圖つたのも、結局作之丞の據遊館教育の力であつた。

明治元年の北越戦役に、加賀藩がよく莫大の軍資供給に堪へ、賞典祿を賜はつたのも、作之丞の力に負ふところが大であるといはねばならぬ。

黒 船

寛政四年、ロシア人が北海道の根室に来て通商を求めてからは、外船の我が近海に出没するものが甚だ多く、對外的に實に容易ならぬ事態に直面して來た。

此の時海防の一日も忽せに出來ないことを察し、廣く四夷の情勢を極め、諸藩あげて國防國家の態勢を急ぎ確立しなければならぬと叫んだのは、實にわが上田作之丞であつた。

殊に能登の地が遠く海へ突出してゐるために、或は外船が來るかも知れぬとあつて、文化四年、幕府の指令にもとづいて、警備は一層嚴重を極めた。藩主齊廣公は青木與右衛門・中川平膳の二人を將として、これに當らしめた。士卒の間には長年の太平になれて士氣がゆるみ、出陣の命令あることを恐れ、病と稱して職を辭する者が多かつた。青木與右衛門もその任でなかつたと見え、間もなく金森量之助がこれにかはつた。然し量之助も臆病侍であつたと見え、拜命後快々として樂しまず、遂に自殺して果てた。

文政八年二月、幕府が外國船打拂令を發したので、加賀藩はこれに應へて沿岸の要港に掲げ、嘉永元年八月、齊泰公自ら打木濱に向向して大砲發射の檢閲を實施した程であつた。この頃能登沖に異國船の船影を認めたとの噂がたつて、藩民は自家に火のついたやうに騒ぎ立て、戦々恟々たる有様であつた。

嘉永三年、作之丞は既に六十三歳の高齢であつた。彼は老の身にも默然として座するに忍びず、決死の覺悟で長途の旅行に旅立つこととなつた。彼は出發に際し、

「近き年より何となく世上物騒がしく伊吉利支などの沙汰區々なり、嘉永戊の春ふと心付けるは十里を隔れば風説眞偽分り難し。況や數千里外の夷賊其の情態中々知るべき便なし。然れども我が日本に於ては西肥を極西とす。彼地に至り、事の状態を考へば、北越に増る理もあるべく、また西洋諸蠻來船の地なれば、ふと聞き知る道もあらん。」

と述べ、更に語をついで、

「官途にあれば墨綬に緘るゝ筋もあり、草莽にありては誰か禦ぎとどむる者あらん。然るに暑を恐れて空しく日を度る事皆忠誠意の足らざる處にして國家に死ぬるの理に違へり。」



と、覺悟して一門弟に附添はれながら、先づ大阪に向かつたのである。大阪で、病にかゝつた門弟を歸郷させ、下關に出で、小倉に渡り、長崎に行き、萩を経て、十箇月目に我が家に歸つたのであつた。其の間作之丞は、各藩の海防状態を調べ、四夷の情勢を察知したばかりでなく、下關では横井小楠、日田では廣瀬淡窓と語つたのである。

歸藩後、國家の前途いよ／＼容易ならぬものを身を以て體得した彼は、早急の國防國家建設の志に燃え、藩侯に上書したのであつた。

藩に於ても益々海防に意を用ひ、嘉永六年三月、齊泰自ら金澤附近の海岸を巡視し、更に翌月能登地方を歴遊したのであつた。同年六月、突如浦賀に米艦が現れるや、海防と武備の充實が、急速に進展して行つたのである。



本多政均

明治二年といへば、諸事神武天皇の古に復さうとして、百制の改廢されること誠に送迎の暇もなかつた時である。藩主慶寧公も今は藩知事として一藩の大改革に當らねばならず、城内は連日連夜會議がつゞいて、多忙を極めてゐた。

八月七日、今朝も執政の首班本多政均は、早く起き出で、床几にもたれて庭を眺めてゐた。八月とはいへ、雨つゞきの日が多く冷氣を感じる程であつた。黎明日本の將來を案じつゝ、深い感慨に沈んでゐるのであらう。彼の心中を去來するものは、唯、今春賜はつた

汝慶寧皇國の爲に厚く心を用ひ、既に藩知事に任ぜられしより専ら朝旨を奉體して黽勉努力せるは、朕の深く嘉獎する所なりといへども、歸藩の後は更に速かに實効を擧げ、列藩の標的たるを期すべし。

とのありがたい大御心であつた。「列藩の標的、列藩の標的。」口ずさみながら、政均は襟を正した。

こぬか雨が庭の松に小さな玉をつけてゐたのが、雀にサツとふるひ落されてしまつた。時

勢の推移は大きくしかも早い。今の一日が昔の一年、十年にも當るやうな氣がしてならなかつた。それだけに藩政の改革に對する彼の熱意は強く、一切の障害を破碎せすんば止まなかつた。したがつて守舊の士や世職を失つた者、或は新政の己に利益のない輩は、急激の改革は一に彼の專斷によるものだと思ふに悪聲を放つてゐた。

花を見たりやお席へ御座れ、今は南瓜の花盛り

と、彼が執政の上席にあるを笑ひ、或は又

土佐さん早うらと出ておくれ、安房餅や次第に手に合はぬ

とも諺つて、前田直信が彼に代つて政局に當つてくれることを希望した。これら保守守舊の徒輩が、如何に嘲笑の聲を浴びせても、一々これらを顧みて仕事をするには、彼の性格が許さなかつたし、それよりも更に寸刻を争ふこの時勢の大轉換が、一秒の遲疑が千年の悔を残すやうに思はれたからである。

本多の森には、いつになく鳥が騒ぎ立て、ねぐらを離れようともしない。この冷雨におび

え切つてゐるのであらうか。政均は、つと立上つて縁先に歩を進めた。胸を大きく張つて、深く息を吸ひ込んだ。ふと夕の執政會議で、前田直信を向かふにまはしての激論が頭をかすめた。「現状打破だ。」と、心に叫んで、呼氣と共に其の幻を吹き消してしまつた。目前には本多の森を背景にした大きな邸宅が雨にけむつてゐる。「廣大なこの邸宅も果してこのまゝに存続させてよいものであらうか、否、存続さすべきではない。やがて新日本建設のために當然捧げなければならぬ。時勢は移るぞ。大きな方向轉換をしつゝある。幾度となく京師の間を往來して、この眼にしかと焼きつけられて來たのだ。時勢は巨大な足どりで進んでゐるのだ。」自分の心を叱咤した政均は、何時しか幕末多事多端の折、自分のふんで來た道を思ひ出さずには居られなかつた。京都に騒亂が起つて、姉小路公知が刺客に害せられた時、齊泰公の命を受けて、天機を奉伺し、輦下を護衛し奉つたこと、次いで八月十八日朝議一變して七卿の都落ちとなつた時七晝夜にわたつて中立賣門を守衛し奉つたこと、更に慶應二年十月慶寧公の入京に従つたこと、同三年十一月藩主に代つて入朝し、十二月二條城に於て徳川

慶喜に會見し、大阪に退いて人心の緩和を圖り、以て宸襟を安んじ奉るべきであると勸告したこと、或は又昨年二月齊泰公に隨つて参内し、天機を奉伺したことなど、次から次と走馬燈のやうにくりひろげられて來る。突然烏が群をなして舞ひ上つた。

「いや、これはとんだ思ひ出にふけつた。まだそんな年輩でないぞ。突進だ、突進だ。列藩の標的たるのみ。」

につこりして書齋に上り、見臺の前に端坐した。

家臣の案内で登城の途に着いたのは四つ時、今の午前十時である。既に登城してゐた重役連中は、政均の登城を控室に待つてゐた。其の頃彼の輿は二十人ばかりの供揃で、石川門をさして肅々と進んでゐた。

かねて彼を専斷なりとして暗殺を企ててゐた山邊沖太郎・井口義平の二人は、百間堀から遙かに政均の登城するのを望み、急いで城内に入り込んだ。かうした企てのあることをつゆ

ほどあらうか。」

と、たづねたところ、彼は嚴然として

「軍事は一切藩の秘密に屬するからして、當事者以外知る必要はあるまい。」

と、いつて語らなかつたといふ。又ある時は血縁の者が仕官運動を試みたが、これには少しも興みしなかつたといはれてゐる。政均が如何に公私の區別を重んじ、職責を果してゐたかを伺ひ知ることが出来るのである。

明治四十二年九月、朝廷におかせられては政均生前の功を賞せられ、特に從四位を追贈あそばされた。

大政翼賛會本部が決戦下に處する國民精神昂揚の一途として、勤皇護國の先覺者に對する顯彰運動を、全国的に展開したのは、昨年一月來のことであつた。

本縣支部亦これに呼應すべく、郷土の歴史家教育者その他有志六十名に委員を囑してその具體的方途に就き、屢々協議を重ねた結果、先づ各委員に地方先覺者の推薦を求め、更に之を常任委員の審査に附して、功績最も國家的に昭著なる五十四人を選び、取り敢ず第一次として顯彰することに定めた。

顯彰の行事に就ては祭典・講演・展覽會・圖書刊行など何くれとなく考へられたが、結局は民風を一時に作興せしむべき展覽會と、之に永續性を賦與せしむべき圖書刊行との二つが取り敢へず採擇せられることとなつた。

かくして展覽會は昨年六月十五日から八日間にわたり、片町宮市大丸樓上に於て開催せら

れ、戦時下未曾有の盛況裡に終始したことは、今も觀者の記憶に新なる所であらう。而して一方圖書の刊行は、翼賛會縣支部から縣立圖書館長河合清吾・前市立圖書館長毎田周治郎・縣立第一中學校教諭楠木勢岐・前材木町國民學校長井野口清作・玉井敬泉・八田健一の六氏に編纂委員を囑託し、爾來右委員間に於て數次協議を重ね専ら青年子弟層のために、高風清節以て百世に儀表とすべき之等の先覺者を紹介し、能ふべくんば讀者をして「郷土の烈士先覺に續かん。」との士氣を昂揚せしむべく、こゝに編纂の第一目標をおくこととした。

従つて之が執筆は、専門の郷土史家と稱せられる人々よりも、寧ろ青年子弟の生活に平素最も理解あり、且交渉ある教育者諸君に依囑するを以て一層効果的なるべきを思ひ、左記十五氏にその分擔起稿を需めていづれも快諾を得た。但し卷一「元治の變」の一編は、加賀藩維新勤皇諸士の列傳に併せて、之が活動の全貌を概説すべき要あるを認め、特に八田健一氏の筆勞を請ひ、尙又裝幀挿繪の一切は之を玉井敬泉氏の考案に俟つこととした。

金澤小將町國民學校 吉田政男

同 高岡町國民學校	野口嘉雄
同 芳齋町國民學校	高橋俊則
同 野町國民學校	高昌文太郎
同 十一屋町國民學校	島崎篤一郎
同 松ヶ枝町國民學校	太田順月
同 長町國民學校	中川隆治
同 新豎町國民學校	佐藤重友
同 味噌藏町國民學校	新村助喜
同 馬場國民學校	東正章
同 瓢箪町國民學校	市田渡
同 淺野町國民學校	高木茂雄
同 材木町國民學校	松村文吉

同 長町國民學校 金子竹千代
同 小將町國民學校 吉村榮

以上執筆者諸君は克く公務匆忙の間に處して致々勞作を續け、凡昨年十一月末までに相前後して脱稿せるを、更に編纂委員の手許に取纏め、査閲検討、修正を加へ添削を施し、茲に本書刊行の運びに至つたことは、衷心同慶に禁へざると共に、その間編纂委員・執筆者を首め關係諸君の絶大なる御努力御協賛に對し、改めて深厚の謝意を表したい。

昭和十九年四月

大政翼賛會石川縣支部

昭和十九年五月二十五日印刷
昭和十九年六月一日發行 (非賣品)

編輯者 大政翼賛會石川縣支部

石川縣河北郡宇氣村宇内日角

松井嘉久

金澤市高岡町九〇

印刷者(中石二〇)高橋覺吉

金澤市高岡町九〇

印刷所 明治印刷株式會社

發行所 大政翼賛會石川縣支部

449
275

終

